　第2章　交換過程

【浜林正夫　「『資本論』を読む」】

ここまで価値形態論をとりあげてきた。価値形態論とは物と物とが交換されるかたち、すなわちA=Bであった。ここには貨幣が一般等価物として登場してきた。ところが、この第2章でも、もう一度貨幣が出てくる。不必要ではないかの論争がかってあった。

価値形態論は物と物の関係が交換されるので人間は出てこない。交換過程ではじめて商品をつくり商品を売る商品所有者という人間が登場する。

価値形態論では「貨幣はなぜ必要になってくるのか」が中心であり、交換過程では商品所有者が「なぜ貨幣を必要とするのか」＝すなわち人間のうごきとして描いたのだと説明されている。

(商品所有者の登場)

p.151 諸商品は、自分で市場におもむくこともできず、自分で自分たちを交換することもできない。

‥商品は物であり、したがって人間にたいしては無抵抗である。もし、商品が言うことを聞かなければ、人間は暴力を用いることができる。

「商品の保護者」：交換過程で初めて

商品をつくり、商品を売る商品所有者

という人間が登場する。（価値形態論－

物と物との交換。人間は登場しない）

「暴力を…」：無理にでもマーケット

に持って行くことができる。

「互いに関連させる」：関連とは商品

を通して現れる人間と人間の関係。

「互いに私的所有者として認め合わ

なければならない」：マーケットで持っ

てきた商品を交換するためには、お互

いに商品をもっている所有者として認

め合うことが必要になってくる。

「契約」：先に経済的関係が基礎にあ

って、後から契約関係が法律的になる。

【宮川實「資本論学習要綱」】

商品と商品所有者との関係

（1）私的所有者としてたがいに認め合わねばならない。

（2）契約は意志関係であり、その内容は経済関係によって与えられる。

（3）人間は経済関係の担い手にすぎない。

（商品は平等主義者）

p.152 商品所有者をとくに商品から区別するものは、商品にとっては他のどの商品もそれ自身の価値の現象形態としての意義しかもたないという事情である。だから、生まれながらの水平派であり犬需学派である商品は

‥直接的には、交換価値の担い手であり、したがって交換手段であるという使用価値をもっているだけである。

‥したがって、これらの商品は、全面的に持ち手を交換しなければならない。

「水平派…」：商品とは平等に現れて、

人間的差別が消える。すべての人が平

等な商品生産者になるという意味。

「魂だけでなく、からだまでも」：商

品は相手をかまわず交換する。

「持ち手を交換する」：価値として実

現するということ。その商品が持って

いる価値が他の物によって表されるこ

と。経済学では「売れ残り」は「価値が

実現されていない」と表現される。

(価値の実現)

p.154 他面では、諸商品は、みずからを価値として実現しうるまえに、みずからが使用価値であることを実証しなければならない。

「みずからを価値として実現しうる

まえに、自らが使用価値であることを

実証しなければならない」：売れる前に

役に立つことを証明しなくてはならな

い。

「使用価値の証明」：他人の要求を満

足させる必要がある。これは、交換して

みなければわからない。交換する前に、

他人にとって役に立つことが分かって

いなければならない。これは矛盾であ

る。

p.155だから、諸商品はおよそ商品としてではなく、ただ生産物または使用価値として相対しているにすぎないのである。

【宮川實「資本論学習要綱」】

商品の全面的交換に含まれる矛盾

（1）商品は使用価値として実現される前に、価値として実現されねばならぬ。

（2）商品は自らを価値として実現しうる前に、自らを使用価値として実証しなければならない。

（3）交換は彼に個人的過程であると同時に一般的な社会的過程である。

（4）他人の商品はどれも自分の商品の特殊的等価物であり、自分の商品はすべての他の商品の一般的等価物とみなされる

（はじめに行為ありき）

p.155　‥当惑してファウストのように考えこむ。

マルクスは、商品所有者の悩みを通

じて貨幣の必然性、必要性を指摘して

いる。マーケットに持って行き、売れた

ら他の人の役に立っているということ。

こういう交換は、商品所有者にとって

は、自分のプライベートことだが、それ

が全体で行われるならば、社会的行為

である。個人的行為と社会的行為が同

時に行われているということ。こうし

た行動を通じて、いつでも商品所有者

は誰でも交換してくれる物をもつよう

になる。つまり誰でも引き取ってくれ

る物、すなわち一般的等価物である。

「ファウスト」：ファウストは「学問

とはすべて灰色である」と悩み、学問を

捨ててまず生きてみようとした。考え

込む前にすでに行動しているというこ

と。

p.156‥交換の歴史的な拡大と深化は、商品の本性のうちに眠っている使用価値と価値との対立を発展させる。

「交換過程の必然的産物」の整理

❶「はじめに行為ありき。だから、彼

らは考えるまえにすでに行動していた」

とは売りに出したということ。他の人

に役立つかどうかを考える前に、とに

かくマーケットへ持って行き、持って

行ったら売れた。売れた、すなわち他の

人に役立っているということだ。

❷商品所有者にとって交換は私的行

為である。しかし全体が行えば社会的

行為となる。私的行為と社会的行為が

同時に行われている。

❸商品所有者は私的行為を通じて、

いつでも誰でも交換してくれる物を持

つようになってくる。誰でも引き取っ

てくれる物、すなわち一般等価物が必

要になってくる。一つひとつの具体的

具体的な品物を持っていたのでは、引

き取って（交換して）もらえるかどうか、

わからないからである。

❹社会的行為が特定の商品を特定の

等価物にする。それが貨幣である。

（商品交換は共同体の終わるところで始まる）

p.157　商品交換は、共同体の終わるところで、諸共同体が他の諸共同体または他の諸共同体の構成員と接触する点で、始まる。

‥直接的必要のための諸物の有用性と交換のため諸物の有用性とのあいだの分離が確定する。

「共同体の終わるところで」：二つの

共同体が余ったものを村はずれに置い

ておき交換が始まる。いったん始まる

と、共同体の中でも商品交換がはじま

る。「偶然的に…」交換が広がり、交換

目当ての生産が始まる→売るためにつ

くる。

「分離が確定する」：直接使うものと

交換するものが分かれてくる。

歴史的発展

直接的生産物交換は、一面では単純

価値表現の形態をもっているが、他面

ではもっていない。

商品交換は共同体のつきるところで、

共同体が他の共同体またはその成員と

接触するところで、はじまる。

交換が規制的な社会的過程になるに

つれて、使用価値と交換価値との分離

が固定する。

直接的生産物交換では交換される商

品はまだ価値形態を受け取っていない。

価値形態の必然性は、交換にはいって

くる商品の数と多様性とが増大するに

つれて成熟し、ついに貨幣の形態にい

たる。

p.158課題はその解決の手段と同時に生ずる。商品所有者が彼ら自身の物品がその交易の内部で同一の第三の種類の商品と交換され、価値として比較されることなしには、決して生じない。

p.159商品交換がそのもっぱら極地的な束縛を打破し、こうした商品価値が人間的労働一般の体化物にまで拡大していくのと同じ割合で、貨幣形態は、生まれながらにして一般的等価物という社会的機能に適している商品に、すなわち貴金属に移っていく。

（貨幣は金銀）

p.160 ところで「金銀は生まれながらにして貨幣ではないが、貨幣は生まれながらにして金銀である」

p.160貨幣商品の使用価値は二重化する。

‥その独特な社会的機能から生じる一つの形式的な使用価値を受け取る。

「金銀は生まれながらにして貨幣で

はないが、貨幣は生まれながらにして

金銀である」：金銀は最初、一つの単な

る生産物として登場し、ついで商品交

換の発生にともなって一つの商品とな

り、さらに商品交換の歴史的発展を通

じて、一般的等価物が生み出され、その

役割を金銀が独り占めしたとくに貨幣

となった。すなわち、金銀は生まれなが

らにして貨幣ではなかった。

　　　　　　同時に、貨幣は一般的等価物の役割

を果たす商品を金銀が独り占めした時

以来発生したのだから、貨幣は生まれ

ながらにして金銀であるということ。

「貨幣商品の価値は二重化する」：入

れ歯や装飾品としての使用価値。

「形式的な使用価値」：金貨は実質的

な生活に役立ち分けではないが、形と

しては他の物と交換できる使用価値を

もっているということ。

　金は交換価値という使用価値をもっ

ている特別の商品である。金はなんと

でも交換できる。これを一般的等価物

という。

（金銀の価値は想像的？）

p.161　金銀の価値を想像的なものとみなす誤った考えを生み出した。

「金銀の価値を想像的なものとみな

す…」：金銀の値打ちがあると人類がそ

のことに同意し、約束したからだ。ジョ

ン・ロック。

（金も労働の塊り）

p.164　その生産のために必要とされる労働時間によって規定され、…その産源地での直接的交換取引のなかで行われる。

（金の価値）：その生産のために必

要とされる労働時間によって規定され

る。

金の価値それ自体の法則：商品の価

値と同じように、その商品の中に含ま

れている人間労働による。したがって、

その値打ちは「原産地の直接的取引」で

決まり、貨幣となって流通に入る徳に

は、価値は決まっていると言っている。

p.165　われわれが見たように、すでにもっ貨幣物神の謎は、目に見えるようになった人目をくらますようになった商品物神の謎にほかならない。

「貨幣の魔術」：商品の物神性がある

その商品をなんでも買えるのが貨幣だ

から、みんなが貨幣を神様のように拝

むようになる。日本的には「カネがすべ

ての世の中」ということ。

了